

グラビア	地域を支える人 川畑さおりさん・鹿児島県喜界町	1
発掘!地域の希望のタネ	〈じばさん商店〉埼玉県秩父市	5
用務にお任せ!	災害から地域を守るためにできること—高知県高知市 秦 一幾	6
書評	谷口吉光 編著 『有機農業はこうして広がった』 菅原敏夫	8
焦点	国連生物多様性条約第15回締約国会議での議論と日本に求められる対応 松田英美子	10

特集 地域を元気にする〈場〉づくり

効果的な〈場〉づくりをめざして	飯盛義徳	16
自治体職員と4つの場づくり	助川達也	25
人とひととがつながる場のつくり方	山納 洋	32
みんとしょという場づくり—私設公共の社会実験	土肥潤也	40
居場所はたくさんあるほどいい	天野敬子	46
「はしふき」という〈場〉が生む地域への愛着	江口忠宏	51

自治研活動レポート	大阪の未来の自治を創造して—大阪府本部 藤本初雄	58
-----------	--------------------------	----

静岡自治研記録	特別分科会●今、必要とされる公共サービスと自治 前田藍 60
	特別分科会パネルディスカッション●今、必要とされる公共サービスと自治 井手英策+阿部亮介+渡辺由美子+川本 淳 62
	—新型コロナウイルス感染症対応から振り返る

自治体の雑誌案内	57
次号予告・編集部から	72



『有機農業はこうして広がった』
人から地域へ、地域から自治体へ
「モンス」二〇〇九
谷口吉光 編著



学校給食
統一自治体選の直前になって、自民党の茂木幹事長が突然小中学校の給食費無償化を提案すると言い出した。書評子はちようと本書で自治体の有機（食材による）給食への苦闘を読んでいたところだったので、無償化だけでなく、有機給食の政策も真剣に検討して欲しいものだと

思った。千葉県いすみ市の調査によれば、有機米給食導入後食べ残しが有意にかなりの率で減ったのである。「有機農業のチカラ」だ。本誌で「給食のじかん」を愛読されている読者はその機微を十分納得されるだろうと思う。

有機農業の社会化

農水省の統計によれば、有機農業の取組面積は二万五二〇〇haで全耕地面積に占める割合は〇・六%となった（二〇二〇年）。二〇一〇年の一万六七〇〇haと比べると五・一%増加した。しかし五割増しといえども〇・六%である。有機農業の数字以上の伸びしろ、影響力の源泉を丹念な取材、幅広い考察で描いたのが本書である。行き着いた考察軸が「有機農業の社会化」。「有機農業はその価値と機能によって広がっている」。

自治体の政策
取り上げられている自治体は、いすみ市、岐阜県白川町、山形県高島町、大分

県臼杵市。有機農業が広がっていく歴史が語られる。出発点はさまざま。農家研究会、農民運動、サーファーが都会から居ついて有機食材で自活、などなど。地域に働きかけ、自治体が政策化し、条例ができる。すべての例に有機給食が登場する。政策は地域の活力を生み出してきた。本書は、本号の特集「地域を元気にする」の別冊のような形を呈している。自治体は出発点に立っているのだ。

農水省も変わろうとしている。二〇二一年「みどりの食料システム戦略」を公表。二〇五〇年までに有機農業面積を一〇〇万ha（全農地の二五%）！

本書の行間にもう一つ。本書の企画段階でのメンバー、有機農業の研究者、唱道者、何よりも出版社コモンスの代表大江正章氏は本書の完成を待たずに病に斃れた。彼は有機農業に地域を豊かにする力があることを誰よりも信じていた。

評者 菅原敏夫 本誌編集委員